

# 郷愁の詩人 与謝蕪村

映画文学人生論

萩原朔太郎 (1886-1942)

『郷愁の詩人 与謝蕪村』(1936) 「第一書房」

『月に吠える』(1917) 「感情詩社」 「白日社」

『氷島』(1934) 「第一書房」

『絶望の逃走』(1922) 「第一書房」

詩人蕪村の魂が詠嘆し、憧憬し、永久に思慕したポエジイの実体は何だろうか

郷愁を知る者は郷愁の詩人を知る。近代詩人萩原朔太郎が知ったのは与謝蕪村。江戸時代の俳諧師を自分自身に重ね合わせて、郷愁の詩人にしてしまったが、その主張には説得力がある。

君あしたに去りぬ

ゆうべの心千々に何ぞ遥かなる。

君を思うて岡の辺に行きつ遊ぶ。

岡の辺なんぞかく悲しき。

この詩の作者の名をかくして、明治年代の若い新体詩人の作だと言っても、人は決して怪しまないだろうと萩原朔太郎はいう。たしかに、若い頃の私なら、これが北村透谷か島崎藤村の作だと言われても怪しまなかつたにちがいない。

「詩人蕪村の魂が詠嘆し、憧憬し、永久に思慕したアイデアの内容、即ち彼のポエジイの実体は何だろうか」と朔太郎は問いかけて、「それは時間の遠い彼岸に実在している、彼の魂の故郷に対する「郷愁」であり、昔々しきりに思う、子守唄の哀切な思慕であった」と自ら答えている。

アイデアとかポエジイとかいっても、そんな言葉は黒船来航以後に西洋から入ってきたものだ。蕪村が知るはずはないが、朔太郎は外来語を使って強引に説明してしまった。



# 郷愁の詩人 与謝蕪村

映画文学人生論

遅き日のつもりで遠き昔かな

代表作はこれだという。「この句の詠嘆しているものは、時間の遠い彼岸における、心の故郷に対する追懐であり、春の長閑な日和の中で、夢見心地に響く子守唄の思い出である」。

遠き昔とはいつのことだろう。江戸時代か万葉集の時代か、それとも子供時代か。いずれにしても詩人は時間を超えて心の故郷への郷愁を唄う。

白梅や誰が昔より垣の外

妹が垣根三味線草の花咲きぬ

春の海終日のたりのたりかな

月天心貧しき町を通りけり

凧（いかのぼり）きのふの空のありどころ

朔太郎によれば、蕪村は不遇の詩人であった。その生存した時代において、ほとんど全く認められず、空しく窮乏の中に死んでしまった。

蕪村が評価されだしたのは、明治時代になってからのことだが、正岡子規は蕪村のように自然をあるがままにスケッチする写生主義を唱えた。それに対して、詩人蕪村の本質を主観的な郷愁とみなしたのが朔太郎だ。写生か郷愁か。よくわからないが、今の私は「衰へや齒に食ひあてし海苔の砂」という芭蕉の写生句にさえも郷愁を感じる。

愁ひつつ丘に登れば花茨